

心理療法の構造分析Ⅲ

～スピリチュアル・セラピーの技法～

大竹優子（大阪） 訳

要旨：近年、スピリチュアリティが様々な分野で注目される中で、日本のアドラー心理学界でも、アドラー心理学カウンセリングにスピリチュアリティを取り入れたセッションが行われ、その理論的考察の報告がされてきた。しかしこれまでにスピリチュアル型セッションの技術的報告はなされていない。そこで今回、2つのケースの逐語録を分析して、スピリチュアル型セッションの技法について調査した。その結果、治療者はスピリチュアル型セッションに独特な「言葉の変換」技法を用いて、従来のライフスタイル分析を中心とした古典的アドラー心理学治療とは異なるタイプのセッションを行っていることがわかった。それは、絶対的全体論に基づいた語り直しによってクライアントの共同体感覚育成を目指すというものであった。本稿ではセッションの逐語録を分析しながら、スピリチュアル・セラピーの理論的、思想的、技術的側面について検討したことを報告する。

キーワード：アドラー心理学、心理療法、理論、スピリチュアル・セラピー、質的研究

1. はじめに

私たちはみな、幸福になりたいと願って生きている。では、人はどうしたら幸福になれるのだろうか？ 幸福の基準や幸福になるための方法は、時代と共に移り変わってきた。その一つが、近代西洋社会を中心に発展した物質主義の思想や科学技術である。いま、先進国と言われている国で、私たちは大変に豊かな暮らしをしている。これが近代科学技術の発達のおかげだということに疑う人はいないだろう。しかし、科学信仰や行きすぎた物質主義の思想では決して幸せになれないことに、20世紀後半から人々はだんだんと気づき始めた。この科学崇拝や物質主義から脱却するための思想としては、宗教とスピリチュアリティの2通りが考えられている。近代科学信仰に疑問を持った人達は、かといって中世の幸福の基準であった宗教の世界へと戻る訳にもいかなかった。そこで、幸福への道としてスピリチュアリティが注目されることになったのである。スピリチュアリティとは、神や仏、ハイヤーパワーなど、個人個人がそれぞれの超越的存在とのつながりを信じて暮らす生き方である。

アドラー心理学の世界でも1970年代後半から、スピリチュアリティとの関係が注目され始めた。本邦では野田俊作がアドラー心理学とスピリチュアリティの融合について早くから取り組んできた。野田はアドラー心理学のカウンセリングにスピリチュアリティを取り入れて変法とし、またスピリチュアル・セラピーに関する理論的考察も著している。ところが、スピリチュアル・セラピーの技術的側面についてはこれまでに詳しい研究報告はされていない。アドラー心理学とスピリチュアリティが融合したカウンセリングまたは心理療法セッションでは、実際にはどのような

ことが起きているのだろうか。それを分析して遺すことはできないだろうか。そこで今回は、スピリチュアル型セッションの構造と、そこで使われている技法について調査した。

著者はこれまでに、同一治療者の心理療法セッションの逐語録を分析調査^[1,2]、治療者がセッション中に「言葉の変換」という技法を用いて洞察の段階でのクライアントの抵抗を減らしたり、また、同技法をクライアントの私的論理を明確に言語化するために用いている事を報告した。今回も同様に、セッションの逐語録を分析した。その際、日本語の文が「主題（主語）と様態」という構成要素から成り立っていることに着目し、この視点から「言葉の変換」を探した。本研究では、セッション中に発話された文の構成要素のうち、その文の主題（主体）となっているものを「主宰者」と呼び、文中に示されている、物事のありようを「様態」と呼ぶ。これら主宰者と様態が変化の様子を逐語録から抜き出してみると、治療者はスピリチュアル・セラピーにおいて、全体論を土台とした特徴的な「言葉の変換」を用いていることがわかった。これについて若干の考察を加えながら報告する。

なお本稿は、2011年岡山での日本アドラー心理学会総会での発表内容をまとめたものである。また、今回分析したスピリチュアル型セッション内容は、従来の、ライフタスクの解決のみを目指した「カウンセリング」にもライフスタイルの変化を目指した「心理療法(サイコセラピー)」にも当てはめにくいいため、本稿では「スピリチュアル・セラピー」という呼び方で統一することとする^[3]。

2. 対象と方法

2-1 対象

2008年2月より2009年1月までの間に行われたアドラー心理学ワークショップでの、同一治療者による個人カウンセリングのうち、超越的存在とのつながりを扱ったスピリチュアル型セッション2例の逐語録を、次に示す方法で分析した。研究目的の録音について、クライアント及び治療者より口頭、文書またはEメールで了解を得た。

なお、以下に提示する発話には、個人情報保護と内容理解のために、全体の流れに差し障りない程度の変更を加えてある。

2-2 分析方法

逐語録をもとに、次の方法で分析した。

- 1, 治療者の第一発話を“T1”とし、以後同様に治療者の発話に番号を付けた。以後治療者の発話はすべてこの番号で呼ぶ。例えば、治療者の第30番目の発話を、T30と呼ぶ。クライアントの発話は“C”とし、治療者の発話と区別した。
- 2, 逐語録よりメタ・メッセージを拾い上げ、そのときの発話を記録した。
- 3, 逐語録より、次の項目を抽出した。
 - 1) クライアントの語る現在の問題
 - 2) 治療者が操作を開始した発話の番号と、その発話
 - 3) クライアントの最終的な語りの変化とその発話箇所
 - 4) 2) から3) までに見られる「主宰者」の変換と「様態」の変化。

ここで、「メッセージ」とはクライアントの次の発話を規定する治療者の発話、「メタ・メッセー

ジ」とはそれからしばらくの間の話題を規定する治療者の発話をさす。また、「相 (phase)」とは、あるメタ・メッセージから次のメタ・メッセージまでのひとまとまりの対話をさす^[4]。また本研究では、発話される文の構成要素のうち、物事を起こしている主体または文の主題を「主宰者」と呼び、物事のありようを「様態」と呼ぶこととする。

3. 結果

3-1 メタ・メッセージからみた全体の構成について (表1)

ケース1では5つ、ケース2では2つのメタ・メッセージがみられた。つまりセッションが5つあるいは2つの相から成り立っているということになる。これまでに同様な手順で調査した古典的心理療法では、一つのケースについて12から14のメタ・メッセージおよび相が見られた^[2]ことと比較すると、スピリチュアル型セッションではずいぶん少ない相から成り立っていることがわかる。

各相をみると、ケース1では始めに「現在の問題の相」、次に「早期回想の聞き取りの相」、「私的論理の相」、「現在の問題との関係の相」と続き、最後に「神さまについての相」が見られた。またケース2は、「現在の問題の相」と「ご先祖さまについての相」の2つの相から成り立っていた。

ケース	発話番号	メタ・メッセージ	相	
ケース1 (T1 ~ T 125)	T1	はい、どんなお話ですか。	現在の問題	個人 の相
	T7	子ども時代の思い出を。	早期回想のききとり	
	T9	どんな感情がありましたか。	私的論理	
	T16	例えばどんなことがありますか？	現在の問題との関係	
	T24	学校の神さまについて聞きたいんですが。	神さまについて	全体の相
ケース2 (T1 ~ T 110)	T1	はい、どうぞよろしく。	現在の問題	個人の相
	T5	これは、あなたのご先祖さまという神さまの仕業か、日本の国の神さまの仕業か、仏さまかイエスさまか、ご先祖さまについて世界の神さまの仕業か、どの分担なんでしょ、窓口は。		全体の相

表1. 各ケースのメタ・メッセージと相

3-2 「個人の相」と「全体の相」 (表1)

メタ・メッセージでわけられたこれらの相について逐語録を参照すると、ある相を境に文の語りかたが大きく変化しており、セッション全体を二つの大きな相にわけることができた。ケース1では第1相目の「現在の問題の聞き取りの相」から第4相目の「早期回想と現在の問題の関係」の相までが前半のひとまとまり、第5相目の「神さまについての相」が後半のひとまとまりとなっていた。またケース2でも、第1相目「現在の問題の相」と第2相目「ご先祖さまについての相」の間で、セッション中の文の語りかたに違いが見られた。どちらのケースも前半は「私」や「あなた」といった「個人」が文の主宰者となっているのに対して後半は「神さま」や「ご先祖

さま」などの超越的存在が主宰者となっていた。例えば、次に示す逐語録のようである。

〈ケース 1：現在の問題〉

T 1：はい、どんなお話ですか。

C：はい。教師になって 20 年目になるんですけど、近頃、教師をやめて他の職業に就きたいという気持ちがあって揺れています。地元が観光地で、外国の観光客が多いので、英語を話すガイドになろうかと思っているんですけど、今の仕事は経済的な面では満足しているんです。でもこれが無くなると好きな旅行も生活もできないなあ、どうしていいのかなあと。それで、仕事を辞める気持ちはあるんだけど、迷っているところです。

(略)

T 4：どんな学校の先生をしているんですか？

C：中学校に勤めています。学校自体は荒れていないのですが、(略) 生徒同志や私に対しても、人の傷つくような言葉を言ったり、態度をしたりする生徒がいるんです。そういうのを聞いているとつらくなります。もう少し自分が穏やかな気持ちでいられるといいなあと思ってます。

上記の会話では主語が省略されているところが多いが、文脈から、クライアントの発話の主語はほとんどが「私」や「生徒」、治療者の発話の主語は「あなた」であることが推測される。ここでの文の主宰者は「個人」である。

次に示すのは同じケースで、文の語り方が変化した場面である。

〈ケース 1：主宰者の変換〉

T18：いい学校、学校生活っていう、職場生活があるとしたら、どんなふうなんですか？

C：ええと、みんなと一緒にいろんなことに取り組めるような学校、かな。

(略)

T20：たとえば、どんなことに一緒に取り組んで、どんなふうになりたいんでしょう？

C：うん、生徒指導なんかで手をやく子がいれば、自分も何か違う形でその子にかかわれたらいいなと思ってます。

(略)

T23：それはたとえばどんな子ですか？

C：ええと、たとえば、人に傷つくことを言ったりやったりする子です。(中略) その子の力が何か違うことで活かされればいいなあと思うんですけど。

T24：あの一、ここはスピリチュアルワークですので、その、学校の神さまについて聞きたいんですが。(←メタ・メッセージ。「学校の神さま」登場)

C：学校の神さま！

T25：うん。学校の神さまについて教えてください。(←「(学校の) 神さま」が主宰者。以後同様。)

C：…校の神さま、について話をする…？

T26：学校に神さまいませんか？ いますか？

C：…いてほしいですね。

T27：ああそうですか。それは、どんなことなんでしょう。もう少し説明してほしいんだけど。その、学校のね、スピリチュアルな役割について。

T24 の前までは、発話された文の主宰者は冒頭部分と同じ「個人」である。T24 以降の会話の

主宰者は「(学校の) 神さま」となっている。T24 で、治療者は初めて「神さま」を持ち出した。この後の会話では最後まで、常に「神さま」を主宰者とした会話が続いていた。

ケース2でもセッションの前半と後半で、ケース1と同じように語り方の変化が見られた。次の会話はケース2のセッション冒頭部分である。

〈ケース2：現在の問題と主宰者の変換〉

T1：はい、どうぞよろしくお願ひします。

C：はい。ええと、私の長女は22才なんですけれども、4年前から会っていません。(娘は)高校を卒業すると、家にはいられないと言って、自分でバイトをして、地方の大学へ行きました。来ないでほしいというので、訪ねて行きませんでした。…(中略)…彼女の方にもいろいろ事情はあったんだとは思いますが全然掌に載らなかつたんですけれども、先日、外国から生活費の援助を求める手紙が来ました。それで、…(略)…しばらくは戻って来ないだろうと思うんです。

T2：じゃ、おふくろ小包の中身を考えないといけないんだ？

(T3：略)

C：ええ。で、以前ちょっと相談したときに、連絡が来るのを待ちましようと言われたのですが、私は待てずに様々なものを送って、ストーカーのようだと言われました。それで、…(略)…いつか彼女が帰って来たときに、私は彼女の前に立っておれる自分でありたいと思うし、彼女の気持ちをちゃんと私は理解してあげたいと思うんです。それと、手紙を書きたいけど、書いちゃいけないのかな、教えてほしいな、と思うんです。(←以上、現在の問題)

T4：えええええ、問い1。

C：はい。

T5：これは、あなたのご先祖さまという神さまの仕業か、日本の国の神さまの仕業か、仏さまか、イエスさまか、世界の神さまの仕業か、どの分担なんでしょ、窓口は？(←メタ・メッセージ。超越的存在の登場)

C：…

T6：難問だけど、これは正しい問いです。

C：…因果応報という言葉がありますけれども、娘がそういう風になったってことは、私の生い立ちとか、私の…

T7：すべての人間の運命は、その神さまと関係しながら決められると思うんです。その全体の中の部分としてわれわれがあるから、全体の意思でもって部分の動きが決まると思うんですよ。

ケース2でのクライアントの最初の発話は、現在の問題の提示であるが、ここでは「私」「彼女(娘)」といった「個人」が主宰者となっている。治療者の発話も、T2では主宰者は「あなた」である。このケースで語り方が変わったのはT5であった。T5で治療者は、超越的存在を主宰者として持ち出した。T7も超越的存在を主宰者とした発話である。以降、治療者の発話は最後まで、超越的存在を主宰者としていた。

このように、どちらのケースも前半では「私」などの「個人」を主宰者とした語りがされ、後半の「神さまについての相」や「ご先祖さまについての相」では、ある超越的存在を主宰者とした語りがされていた。超越的存在を主宰者とすることはすなわち、物事を全体からの視点で語ることとなる。そこで、このようにわけられたセッションの前半を「個人の相」、後半を「全体の相」と呼ぶこととした。

3-3 「主宰者」の変換

「個人の相」と「全体の相」とでは、語りの「主宰者」が違っていた。「個人の相」から「全体の相」への転換は、治療者がある発話から、個人でなく超越的存在（＝全体）を主宰者とした語りを始めることにより引き起こされていた。治療者は「個人」から「全体」へと主宰者を変換する「言葉の変換」技法を使っていたのである。そして、初めて主宰者を「全体」に変換した発話が、「全体の相」へのメタ・メッセージとなっていた。上に示した例だとケース1の T24、ケース2の T5で治療者は初めて超越的存在を主宰者として持ち出しており、これらが後半の「全体の相」へのメタ・メッセージとなっていた。

3-4 様態の変化

クライアントの最終的な語りの変化は2ケースとも、主宰者の変換が行われた後の「全体の相」で起きていた。そこで、「全体の相」の逐語録を参照し、主宰者が「個人」から「全体」に変わることで、文の他の構成要素である「様態」すなわちその文で語られている物事のありように、どのような変化が起きるかを調べた。ここで、ケースごとにセッションを追って、「全体の相」での様態の変化をみていく。

<ケース1：主宰者変換後、様態の変化>

T26：学校に神さいますか？ いますか？

C：…いてほしいですね。

T27：ああそうですか。それは、どんなことなのでしょう。もう少し説明してほしいんだけど。

その、学校のね、スピリチュアルな役割について。

C：ええと、人が集まるところで、その中でどうやって人間関係を作っていくか。

T28：もう少し大きな問題はないですか？学校のスピリチュアルな役割について。

C：大きな問題？

T29：うん。学校ってのはですね、神聖な場所だと思うんですよ、思いませんか？

C：……

(略)

T33：発展途上国の人たちが、何はともあれ欲しいのが学校なんです。何で彼らがそんな学校が欲しいかって言うと、国のもっとも神聖な場所のうちの一つだからです。なぜ学校はそんなに神聖なのでしょう？

C：…無知じゃなくなる？

T34：学校は、何を与えようとしているんでしょうか？

C：人同士の絆？

このあたりで治療者は、「学校はどんなところか」についてクライアントに問いかけている。主宰者を変換された T24 から続いて「神さま」を主宰者とした発話をしているので、その後の様態は神さまと関係づけて語られることになった。例えば T29 では「学校とは神さまと関係のある場所だ」と語っていることになる。同様に T34 は「神さまは学校を使って何を与えようとしているのか」と問いかけていることになる。さらに後の会話を示す。

T35：もっと大きな問題。それはね、抽象的に言うと、僕の考えは、精神を与えようとしているんだ。心、{C: うん、うん} 魂。違う？

C：……

T36：学校は知識ももちろん与えますけど、知識だけだったら塾と一緒になんですよ？ で、精神を与えるって、それじゃ何の精神か。民族の精神です。どうですか。

C：民族の精神

T37：アメリカの学校はアメリカの民族の精神、日本の学校は日本の民族の精神を作る場所なんですか？ 人格形成とか、人間形成とかって言うのを具体的に考えるとその日本の国民の精神を、子どもたちが持てるようにすることじゃない？ {C: うんうん} 日本国民のね、培養所なんです。だからあそこで何が作られてるかって言うと、未来の日本国が作られてるんですよ。そう思いませんか？ だから日本国家にとって最も神聖な場所なんです。

C：うん…そうですね

T38：そこが駄目になると、何十年か後の日本国家が駄目になるんですよ。

C：町で一つしかない学校にいたことがあるんですけど、この子たちが大人になるとこの町をつくっていくんだなって思ったことがあります。

T39：そうそう。国もそうで、国中の学校が何十年後かの日本をつくるんです。あなたたちの教えている子どもたちも、未来の日本をつくる日本の国民なんですよ。だからそれは、めちゃくちゃ神々と関係のある仕事だと思いませんか？

C：…それは思います

T40：ただ人間関係を仲良くとか丁寧な言葉を使おうとかいうことじゃないんです、そういう国を、そういう生活を作ろうとしてるわけね。…その中で、あなたの仕事はどうですか？

C：…私の仕事？

T34 での問い「神さまは学校を使って何を与えようとしているのか」についてが T39 までの話題となっている。それで、続く T40 の質問の様態は、「神さまが求めた学校という場所で、あなたの仕事はどうですか？」ということになる。つまり、「全体のなかで、あなたの仕事はどうですか」と質問していることになる。T40 の後の反応から、クライアントはこのことについて初めて考えたことがうかがえる。この質問でクライアントは自分の教師としての仕事をこれまでとは違った視点でみるようになったと考えられる。

さらにセッションが進むと、たとえば、T40 に関連していると思われる次のような会話がみられた。

T99：もっと根本的に、日本の中心にある魂が、あなたを使って、子どもたちを育てようとしているっていう感じは、わかりますか？ わかりませんか？ もしわかれば教師が向いてるし、まったくわかんなければやめた方がいいです。

(略)

T101：あなたはどっちなの？

C：…どっちだかわからないです。

T99 は、クライアントの最初の問題「私は教師をやめようかどうしようか迷っている」を、超越的存在を主宰者として変換した形である。主宰者を超越的存在とすることで、「全体」が「個人」を使う、というつくりの文に様態が変化した。これで治療者とクライアントは全体からの視点で教師という職業について語ることになった。ここで、クライアントの現在の問題の中で語られた「英語を話すガイドになろうか迷っている」も、同じように「神さまは私を、英語を話す日本人のガイドとして使おうとしているかどうか」に変換できることに気付く。さらにセッションの続きを見ていく。次は、クライアントの語りが変わった場面である。

C : 日本の魂ってなんですか？

T105 : それは、日本のよき伝統です。

C : はい。

T106 : 僕も外国で暮らしたのでそれは本当に感じました。このお人好しはどっから出てくるんだろうって。これは日本の魂なんだ。

C : 私は旅行が好きで、この前もタイに行ったんです。タイでは男の人は一生の中で一度はお坊さんになるそうなんですよね。だからそこでいろいろな精神を学んでくるんだな、って思いました。

T110 : そう。あれはタイの精神ですね。じゃあ日本の精神はどこで学ぶのか。

C : 学校です。

T111 : 学校です。

C : そうですね。

T112 : そうです。

T110 の質問「日本の精神はどこで学ぶのか」に、クライアントはきっぱりと「学校です」と答えた。これまでの文脈から、「学校は神さまが日本の精神を学ぶ所として求めた場所だ」とクライアントが納得したことがうかがえる。

このケースでの、主宰者と様態の変化から見た「言葉の変換」をまとめてみる。

<ケース 1 : まとめ>

- **現在の問題** : 生徒の言葉や態度を見ていると教師の仕事を続けるのがつらくて、やめてガイドになろうか迷っている。
- **「全体の相」へのメタ・メッセージ** : T24 : あの一、ここはスピリチュアルワークですので、その、学校の神さまについて聞きたいんですが。(主宰者を「私」から「神さま」に変換。)
- **主宰者の変換に伴った様態の変化** :
 - 「神さまは、学校を神聖な場所とした」
 - 「神さまは学校を使って何を与えようとしているか」
 - 「神さまに求められた仕事である教師とは、そもそも何か」
 - 「神さまから求められた、子どもたちの魂を育てる仕事を、私は日本人として大切にしたい」
 - 「神さまは私を教師として使って子ども達を育てさせようとしているかどうか」
 - 「学校は神さまが日本の精神を学ぶ所として求めた場所だ」

クライアントは最終的に「学校とは何か」について、それまでとは違った、「全体」からの視点で語ることになった。この語りかたでもって職業について語ること、これがこのカウンセリングの問題解決の姿となった。

では次に、ケース 2 で主宰者を変換した後の進行をみていく。前掲の < ケース 2 : 現在の問題と主宰者の変換 > 部分を参照すると、治療者は T5 で主宰者を超越的存在に変換して、どの超越的存在を主宰者と決めるかクライアントに問いかけた。この後「全体の相」での様態の変化を示す。

<ケース 2 : 主宰者変換後、様態の変化>

T 7 : すべての人間の運命は、その神さまと関係しながら決められると思うんです。その全体の中の部分としてわれわれがあるから、全体の意思でもって部分の動きが決まると思うんですよ。

(略)

T11：(略) 僕ら部分は、全体が、あり方を決めるんです。あなたもお嬢さんも、全体がそのあり方をきめてるんだ。ね？

C：はい

T12：あなたが、そういうお母さんだったのも、お嬢さんがそういうお嬢さんだったのも、あなたとお嬢さんで決めたことじゃないんですね？

C：はあ…

T13：認めますか？

C：…はい。

T14：じゃあその全体っていうのは、どれくらい大きな全体か、考えたいんですよ。それはあなたの家族の魂がそうしたかったのか、(略) 国の魂、(略) それとも、キリストさまやお釈迦さまの魂、(略) どれだと思いますか？

C：ぱっと思ったのは、家の魂。

T15：家の魂。

C：はい。

T16：ご先祖さまの願い。

C：はい、はい。

T17：ご先祖さまどう願っておられるんですか？

C：…どう願っている・・・

T18：(略) 先祖は何を願っているのか。

(略)

C：…いろんなところへ行って、戻っておいで

(略)

T21：なぜご先祖さまは、お嬢さんに、世界のいろんなところを見せたいんでしょう。

C：……娘自身に、広いところ行って見てきて、自分の使い道を探しておいでって。

T 7以降、治療者の発話の様態は、「全体が個人のあり方を決める」となっている。T15の後、クライアントは「家の魂」すなわち「ご先祖さま」を主宰者として選んだ。主宰者が「ご先祖さま」に決まった直後の T17 の様態は「クライアントの願い」ではなく「ご先祖さまの願い」を問うものに変化した。

クライアントは T20 の後と T21 の後で「ご先祖さまは、娘に、いろんな所へ行って、自分の使い道を探してほしい(と願っている)」と語った。ここでも様態は「個人の願い」でなく「ご先祖さまの願い」をあらわしている。さらに、

C：夫と私が育ててきた育て方とは全然違う価値観みたいのを娘がもし見つけて、帰ってこれるんだったらいいなあって思います。

T37：うん、ご先祖さまの意思としては、もう家に帰さないでおこうと思われたらどうでしょう？

C：ええっ、どこまでも追って連れ戻したいと思いますけど。

T38：どう思いますか、その計らいは。

C：ああ、計らい…

T39：先祖の意思は、もうこの子は家に帰さないでおこうとお決めになることだって、ないとはいえないでしょう。その時人間が、あなたの計らいでどこまでも追い詰めるというのは、正し

い方向か正しくない方向か。

C : 正しくない方向です。

T40 : あ、そうですか。じゃあ、どうすればいいでしょうね？

C : うーん、そうですね。ご先祖さまにお任せして、私たちは私たちが生きていくしか、方法はないですね。

クライアントがT 37 前で「私」の願いを語っているのに対し、治療者は T37 でご先祖さまを主宰者として問いなおした。そして、T38 前の「娘を連れ戻す」という、「私」を主宰者としたクライアントの語りを、「神の意思」と対比して「人の計らい」と、価値を低めている。さらに後の部分を見ていく。

T66 : あなたの家族の魂は、何をしようとしているの。

C : え、え、…私の家族の魂は、私たちが幸せになるようにって、見守ったり、いろいろしてくれるんじゃないかと。

クライアントの語りが「ご先祖さまは、私たちを、幸せになるように見守り、いろいろしてくれる」と徐々にまとまってきていることがわかる。そしてクライアントの語りが最終的に劇的に変化したのは次の会話であった。

T82 : どうですか？ 家族の魂があって、その家族の神さまは、あなたをずっと見守ってて支えて
いるみたい。

C : …はい…

T83 : これ賛成ですか、反対ですか？

C : 賛成です。

T84 : 賛成ですか。でお嬢さんも同じように支えてるみたい、これ賛成ですか、反対ですか。

C : ん、賛成です。

T85 : で、何がそんなに心配ですか？

C : ははははは、そうですね。ふふふ。……ああ、心配でした、4年間。とっても動揺してまして、あがいてあがいて暮らしてました。

T85 の後のクライアントの発話では「心配でした」「あがいて暮らしてました」と、様態が過去形で語られている。「心配」を過去のこととして語っているのである。ここでクライアントは、最初の問題「私は外国にいる娘に何かしたい、戻ってきてほしい」という「個人」を主宰者とした語りを、「家族の神さまが子孫である私たちを見守って支えてくれている」と、「全体」からの視点で語り直した。そして「心配」は過去のものとなり、これがこのケースの解決の姿となった。

ケース2での、主宰者と様態の変化から見た「言葉の変換」をまとめる。

<ケース2 : まとめ>

- **現在の問題** : 娘が掌にのらない。外国で暮らす娘に何かしたい。娘を理解したい。戻ってきてほしい。
- **「全体の相」へのメタ・メッセージ** : T5 : これは、あなたのご先祖さまという神さまの仕業か、日本の国の神さまの仕業か、仏さまか、イエスさまか、世界の神さまの仕業か、どの分担

なんでしょ、窓口は？（どの超越的存在を主宰者とするか、クライアントに選択してもらう質問。）

● **主宰者の変換に伴った様態の変化：**

「全体が僕ら部分のあり方を決める」

「ご先祖さまは何を願っているか」

「ご先祖さまは、娘に、いろんな所へ行って自分の使い道をみつけてほしいと願っている」

「ご先祖さまは私たちの願いを却下された。それはよいことである」

「ご先祖さまは、子孫が相談してきたらそこへ行って見ている」

「家族の魂は、(子孫が) 幸せになるようにいろいろしてくれる」

「ご先祖さまは、私たちを、幸せになるように見守り、いろいろしてくれる」

「家族の神さまは、(私と娘を) ずっと見守って支えている」

3-4 結果のまとめ

以上の結果から、スピリチュアル・セラピーの2ケースに共通して、以下のような特徴がみられた。

1, セッションの相が大きく二つに分かれた。

前半の「個人の相」では「個人」を主宰者とした語りがされ、後半の「全体の相」では「全体 (= 超越的存在)」を主宰者とした語りがされていた。

2, 2段階の「言葉の変換」が見られた。

1) まず 治療者が「全体の相」のメタ・メッセージとして、文の主宰者を「個人」から「全体」へ変換していた。

2) 主宰者が「全体」へと変換されたことによって、治療者とクライアント双方の発話に、様々な「様態」の変化、すなわち語りの変化が起きていた。

3, 解決のかたちは、クライアントが最初に語った問題を、「全体」を主宰者にして語りなおしたその内容となっていた。

4. 考察

4-1 スピリチュアリティについて

幸福になること、それは人類が誕生して以来の人の課題であり、幸福のための価値基準は、人類の歴史と共に移り変わってきた。例えば古代、人々にとって幸福を左右するものは「魔」であり、呪術という方法を用いて魔をコントロールしようとしていた。中世に入って人間は、「神・仏」を価値基準とした、宗教という方法を用いて幸福になろうとした。宗教が人々に何をすればよいのかを教えてくれることになり、人々はそれに従って生きてきた。そして近代にはいと、幸福の基準は「理性」となり、科学的で理性的な考え方が人間を幸福へと導くと信じられてきた。この考え方は、物質主義や契約社会の思想を生み出した。そして2度の世界大戦を体験するうちに、人々はこの近代思想に行き詰まりを感じ始めた。そこで注目されることになったのが、スピリチュアリティであった。

スピリチュアリティは、人間の理性ですべてを知ることはできないと考え、超越的な存在を信じ、超越的存在とのかかわりに価値の基準を置く。宗教もスピリチュアリティも、超越的存在を信じるという点では似ているが、宗教は、超越的存在やそれとのつきあい方を肯定的に定義し、

その宗教における聖なるもの、教祖、経典を持ち、教団を組織する。これに対してスピリチュアリティは、特定の超越的存在を定めることはしない一方、個人のスピリチュアリティが宗教に根ざすことを否定もしない。スピリチュアリティは、それぞれの人がその人なりの超越的存在と向き合っているという思想である。

アルフレッド・アドラー (Alfred Adler, 1870-1937) の時代にはスピリチュアリティという概念がなく、人々は無神論者か宗教を持つかどうかを以て暮らしていた。ところが、西洋世界の人々が近代科学信仰に疑問を感じ、スピリチュアリティに注目し始めたのに伴って、アドラー心理学とスピリチュアリティの関係について模索することは現代のアドレリアンにとってひとつの課題となった。たとえば、1967年にはH. モサク (H. Mosak) と R. ドライカース (R. Dreikurs) がスピリチュアリティについての論文^[5]を発表しているし、北米アドラー心理学会 (NASAP) では2000年に機関誌 "Journal of Individual Psychology" で、スピリチュアリティの特集を組んでいる。日本でも野田が1980年代から、仏教や東洋思想とアドラー心理学について著し、またスピリチュアリティを取り入れたセッション、スピリチュアル・セラピーを行ってきた。

ここでは考察として、今回の調査から考えられた、スピリチュアル・セラピーの技術的、理論的、思想的側面について、また、アドラー心理学治療とスピリチュアリティとの関係についてみていく。

4-2 スピリチュアル・セラピーとは？

スピリチュアル・セラピーとはどのようなものか。これについて、今回分析したセッションの治療者である野田俊作先生は次のように語られた。

「スピリチュアル・セラピーでは、クライアント個人から発想するのをやめ、クライアントの信じることのできる超越的存在の見地から全体を語り直してもらいます。特定の宗教は支持しませんが、クライアントが特定の宗教を持つ場合はその宗教のフレームワークの立場から語ってもらいます。」[個人インタビュー]

逐語録の分析から、治療者は具体的には「言葉の変換」技法を用いて語り直しを引き起こしていることがわかった。スピリチュアル・セラピーについて考察を進めていく手始めに、まずは今回注目した「言葉の変換」技法について考える。

● 主宰者と様態

今回の研究では、日本語の文が「主題」と「様態」という要素から成り立っていることに基いて「言葉の変換」技法が使われていることに注目した。主題と様態から構成されるという日本語の特徴について野田は、個人ブログの中で次のように述べている。

英語などの西ヨーロッパ現代語では、まず行為の主体（主語）を言って、行為の種類（動詞）を言って、行為の対象（目的語など）を言う、というように、「行為」に関心を集中して文が組み立てられる。日本語はそうではなくて、話の主題（主語）を言って、関心の向かう対象（目的語）を言って、全体の様態（動詞）を言う。^[6]

本研究ではこの引用で主題（主語）と呼ばれているものを「主宰者」と呼ぶことにした。そして、その文でいいあらわされている物事のありようを、「主宰者」以外の要素をすべて含めて「様

態」と呼ぶことにした。なお、日本語ではその場にいる話者が共通して認識していると考えられる言葉を省略する傾向があるため、文中に単語が出てきていなくても、文脈から実際の行為や状態の主体（主題）となっていると考えられる人やものは「主宰者」とした。

例えば、ある人が夕食の献立を考えながら「夕食はなににしようかな？」と言ったとする。この文では「夕食」が主語に見える。しかし実際には夕食について思案している主体は「私」であるので、この文における主宰者は「私」と考えた。その他の文の成分があらわす内容つまり「(夕食は) なににしようか」を「様態」とした。

● 主宰者の変換と様態の変化

上の例で、このとき、夕食を考えているこの人が家族のことを思いついたとする。そうすると「みんなは夕食には何が食べたいかしら？」と言うかもしれない。こうなると、主宰者は「家族(のみんな)」となる。夕食の献立を考えていることは同じなのだが、主宰者が「私」から「家族」に変わると、「私は夕食に何をを用意するか？」から「家族は何を夕食に食べたいか？」へといい表し方が、つまり様態が変化する。このように、主宰者が変わると、同じ出来事をあらわす文全体が変わるのである。

今回調査したケースでは、セッション後半の「全体の相」にはいる時点で、治療者が主宰者を超越的存在すなわち「全体」に変換し、その後一貫して治療者は「全体」を主宰者とした発話を続けていた。語りの主宰者が変わるとそれに連れて様態が変化することを目的として、治療者は、意図的に主宰者を変換していたと考えられる。

主宰者を変えてエピソードを語ってもらう技法に、例えば「相手の台本」というものがある。クライアントに、問題のエピソードを、相手役になったつもりで語ってもらうのである。そのことによってクライアントは、今まで気付かなかった相手役の視点を得ることができ、それが問題解決へとつながっていく。

この「相手の台本」では、主宰者が「私」から「相手」へと変換される。つまり「個人」から「個人」への変換である。これに対して今回のケースで行われていたのは「個人」から「全体」への変換であった。変換する主宰者の次元が違うのである。この、主宰者を「個人」から「全体」へと入れ替える「言葉の変換」技法は、スピリチュアル・セラピーにとってどのような意味を持っているのだろうか。

● 二つの全体論

アドラー心理学の基本前提の一つに、全体論 (holism) がある。全体論とは要素論と対立する考え方で、個人を分割できないひとつのまとまりとしてとらえる立場である。部分は分業して働き、結局人はひとまとまりの個人としてある行動をとる、と考える。この立場をとると、個人の中には葛藤はなく、人間の問題はすべて個人と世界との葛藤であるということになる。

このような、内的葛藤のない個人がライフタスクに対処しながら生きていく、という考え方を、野田は「相対的全体論」と呼んだ^[7]。一方で、仏教のように「世界は一つの全体であり、個人と宇宙は一体だと考える」立場もある。これを野田は「絶対的全体論」と呼んだ^[7]。絶対的全体論においては、個人も世界も一体なのだから、個人と世界の間にも葛藤がないことになる。

クライアントは、自分個人と外の世界との葛藤を問題としてセラピーに望む。セッションのはじめには、「私からみると、こういうことが問題です」と語っているのだから、それは、物事をとりまとめる主宰者は「私」だという、相対的全体論の立場での語りである。これに対して治療者は、セッションのある時点から、一貫して超越的存在、つまり「全体」を主宰者として発話していた。「全体」を主宰者とする、自分も相手も世界もすべて全体の一部として物事が語られ

る。これは絶対的全体論の語りである。治療者は、主宰者を「個人」から「全体」へと変換する「言葉の変換」技法を使って、クライアントの語りかたを相対的全体論的なものから絶対的全体論的にと変化させていたと考えられた。

それでは、語り相対的全体論から絶対的全体論へと変化することにはどのような意味があるのだろうか。

● アドラーの思想

セッションのなかで治療者が、主宰者を「個人」から「全体」へと変換することで、クライアントの語りも相対的全体論から絶対的全体論へと変化した。クライアントはこの変化を通じて徐々に「私個人」でなく「全体」からの視点で物事を見、語るようになったといえるだろう。治療者はクライアントに、いままでのように「これは私にとってどういうことか。私が幸せになるために私は何をしたらよいか。」の視点ではなく、「これはみんなにとってどういうことか。みんなが幸せになるために私は何をしたらよいか。」の視点から出来事を観るのはどうですか、と提案していたと考えることができる。

A. アドラーは "Gemeinschaftsgefühl" (= Social Interest, Social feeling, 共同体感覚) について次のように述べている。^[8]

● **Social feeling** は、生涯を通じて、変化させられ、色づけられ、限定されるケースもあれば、それぞれがその個人自身の家族のメンバーだけでなく、その人の親族、国、そして最終的には人類全体と触れ合うところまで、広げられるケースもある。これらの国境を超えて広がり、それ自体を動物や植物、命のない物体あるいは最終的には宇宙全体にむかって表現することも可能かもしれない。(Understanding Human Nature より)

● 生来的な **Social feeling** は、実際は **cosmic feeling** であり、宇宙のすべての物が一体であることの反映である。それ (**cosmic feeling**) は、われわれの中に生きており、完全には放棄できないものであり、そして体の外側にあるもの達に共感する能力を与えてくれる。(Understanding Human Nature より)

このように、アドラー自身が共同体感覚を絶対的全体論的な立場でもって説明している記述が見られる。この記述からすると、絶対的全体論でもってものごとを観ることは、より成長した共同体感覚でもってものごとを語ることに繋がると考えてよいと思う。そうすると、治療者はクライアントが最終的に共同体感覚を成長させるようにとセッションを進めていたのだと考えられた。

4-3 アドラー心理学治療としてのスピリチュアル・セラピー

● スピリチュアル・セラピーはアドラー心理学治療か？

ところで、今回調査したスピリチュアル・セラピーでは、ライフスタイルの分析を中心にしていなかった。ライフスタイル分析を用いた古典的なアドラー心理学治療とはかなり趣を異にするが、このようなスピリチュアル・セラピーはアドラー心理学治療といえるのだろうか。

ある治療技法が、アドラー心理学に基づく治療といわれうる条件について、野田は、

- 1) ライフスタイル論を含めたアドラー心理学の基本前提に基づいてデザインされていること、
- 2) 共同体感覚の育成を目標にしていること、と述べている^[9]。

L. スペリー (L.Sperry) もまたアドラー心理学的アプローチを他派のものと識別するものとし

ていくつかの定義を提案しているが^[10]、その主旨はアドラー心理学の基本前提と、共同体感覚に沿っていることの2点に絞ることができると考えられる。

今回分析したケースでは、これまでにみてきたように、相対的全体論的な語りから絶対的全体論的なものへと語り直しが行われていた。アドラー心理学の基本前提の一つである全体論に基づいたデザインといえると思う。また思想面でも、すでに述べたとおり、セッション全体は共同体感覚の育成を目標に進められていた。

以上のことから、今回分析した2ケースのようなスピリチュアル・セラピーは、アドラー心理学治療の条件を満たしていると考えられた。

● アドラー心理学治療におけるスピリチュアル・セラピーの位置づけ

それでは次に、アドラー心理学治療にスピリチュアリティを取り入れることにはどんな意味があるかを考えてみたい。

スピリチュアル・セラピーはアドラー心理学治療のなかでどのような位置を占めるのだろうか。アドラー心理学の心理治療におけるスピリチュアル・セラピーの位置づけについて、野田は次のように記している。

カウンセリングにおいて、代替行為が信念の許容範囲内にある場合には、学習Ⅰでことたりるのであるが、そうでない場合には、カウンセリングをいったん断念して、学習Ⅱのプロセスを用いる必要がある。すなわちサイコセラピーが必要とされる。同様に、サイコセラピーにおいて、代替信念がライフスタイルの許容範囲内にある場合には、学習Ⅱでことたりるのであるが、そうでない場合には、サイコセラピーをいったん断念して、学習Ⅲのプロセスに頼る必要が出てくる。(中略) 信念体系を手つかずにしておいて、それと矛盾する信念を学んでもらうことは不可能なのである。(中略) むしろ、信念のシステムであるライフスタイルそのものを放棄するようなタイプの治療が必要である。それが学習Ⅲをもちいたスピリチュアル・セラピーである。^[11]

ここで学習Ⅰ・学習Ⅱ・学習Ⅲとは、グレゴリー・ベイトソン (Gregory Bateson) の提唱した3種類の学習プロセスである。これらのプロセスとアドラー心理学の心理治療に関して詳しくは文献^[12]を参照していただくとして、ここで重要なのは、スピリチュアル・セラピーはカウンセリングや古典的心理療法で難航する事例に対しても適応となるということである。

4-4 回心を起こしやすくする工夫

カウンセリングや古典的心理療法で難航する事例に対して他の方法で心理治療を行うことを考えると、それはかなりの難題であり、成功させるためには並々ならぬ工夫が必要ではないだろうか。一歩治療者はどのような工夫をしているのだろうかという疑問がわく。

スピリチュアル・セラピーの効果と危険性について野田は、次のように述べている。

(スピリチュアル・セラピーは) 絶対的全体論の枠組みのなかで代替案を一切与えないで、これまでの解決行動ないし価値判断を断念させる方法であり、これによって真に共同体感覚を目覚めさせることができる。^[13]

しかし同時にスピリチュアル・セラピーは「禅の公案のように難問であり」、「これは一種の苦行になりうる」し、さらには洗脳法として用いられたり発狂の危険も示唆されていたりと、「使い方によってはきわめて危険でありうる」というのである。^[13]

スピリチュアルな治療においてクライアントがこれまでの価値判断を断念し、真に共同体感覚を目覚めさせることを野田は「回心 (conversion)」と呼んでいる^[14]が、安全に、苦行となることなくクライアントが回心を起こすために、治療者はどのような工夫をしているのだろうか。

● 「てこの支点」を確保する

基本的信念を変革するための技法として、『てこの支点』を確保する」というのがある。クライアントの持つある価値観を見つけ、これを「てこの支点」として、他の価値観を転換させるのである。^[15]

今回調査した2ケースの治療者である野田先生が本研究にあたってのインタビューで語られた言葉を再度引用する。

「スピリチュアル・セラピーでは、クライアント個人から発想するのをやめて全体を、クライアントが信じることのできる超越的存在の見地から語りなおしてもらいます。特定の宗教は支持しませんが、クライアントが特定の宗教を持つ場合は、その宗教のフレームワークの立場から語ってもらいます。」 [個人インタビュー]

大抵の人は「神さま」「仏さま」「ご先祖さま」など、主宰者となる超越的存在について何らかのイメージをすることができるだろう。そしてこうした存在は基本的に我々によいことをなしてくれる、という信頼感も持っていると思われる。特定の超越的存在を擬人的にイメージすることが難しい場合には、「ハイヤーパワー」や「全体」、「世界」などの言葉を使ってもかまわないであろうが、要するにクライアントその人が信じることのできる超越的存在を明確にすることが重要なのだと考えられる。

クライアントの持つ価値観を「てこの支点」として確保すると、クライアントにとっては自分の価値観のうちの一つを保持しながらセッションが進んでいくことになる。この支点をつかみながらであれば、安心して別の価値観について考えることができるだろうし、もしかしたらこれを頼りに今まで持っていた私的感覚を手放すこともできるかもしれない。また治療者にとっても、クライアントの信じる超越的存在を「てこの支点」とすることは、クライアントの語りの範囲をある程度制御することができて安全であり、この意味でも極めて有用であろう。

スピリチュアル・セラピーでは、クライアントの持つ価値観の一つとして超越的存在に登場してもらうことが可能となる。この超越的存在を「てこの支点」として回心 (conversion) をおこなっていたのである。

● 場の設定

また野田は、スピリチュアル・セラピーについて、「フレームワークを設定することが必須であり、そのために「合宿形式の濃厚な学習グループを用いることが多い。」と述べている^[16]。フレームワークとは、「精神変容を起こすための特殊な設定」であるが、詳しくは文献^[17]をご参照いただきたい。

合宿の学習グループでは、1) 世間や日常と距離を置くため、新しく設定されたフレームワークを受け入れやすく、2) 少人数の濃密なグループでは確かな所属感が生じやすい、といったメリットが考えられる。日常から離れた少人数のグループ全体に対して絶対的全体論のフレームワークを用いておいて、セッションに備えるのである。これらは下準備として、回心を起こすための助けになるだろう。また、こういったグループでは、3) セッション後日常へ戻るまでにある程度の時間がとれる。このため、クライアントがセラピーで回心を起こした後、それを消化す

る時間ができ、日常生活へ戻ったときに起きる混乱を小さくすることができるだろう。

今回の2ケースとも合宿ワークでのセッションであり、セッションまでに様々なディスカッションやグループワークが行われていた。これらはすべて、クライアントが混乱を来すことなく安全に回心を起こすための工夫と考えられる。

4-5 スピリチュアル・セラピーの論理的根拠

これまで、スピリチュアル・セラピーの技術面やアドラー心理学のなかでの位置づけについて考えてきた。最後に、今回調査したスピリチュアル・セラピーは、どのような論理的根拠に基づいているのかを考える。

野田先生は、スピリチュアル・セラピーの論理的根拠について次のように語られた。

「アルフレッド・アドラーは、神は人間の完全性の目標 (*goal of perfection*) だと述べました。それで人は、劣等の位置から完全性の目標にむかって目標追求をするのですが、永遠にその目標にたどり着かないと考えていました。

アドラーのこの考え方では、短時間で劇的な変化を起こすには無理があります。ではどうするかというと、その「完全な存在」がいたらどういう見方をするかを考えるように、クライアントを勇気づけるのです。

これは、密教の考え方です。普通の仏教(顕教)では、人は仏になれるように日々修行し功德を積みます。これに対して密教では、自分が仏だと考え、仏だったらどうするかを考えます。これが、スピリチュアル・セラピーの論理的根拠なのです。」[個人インタビュー]

古典的心理療法ではクライアントのライフスタイルを分析し、その上で、私的感覚ではなくて共同体感覚に基づいた行動をするように少しずつ勇気づけるのであるが、この方法ではクライアントがこつこつと自分の感情・思考・行為を観察し実践をすることが必要であり、変化に時間がかかる。これに対してスピリチュアル・セラピーでは、一度のセッションで「個人」としての語りを離れ、超越的存在の視点から「全体」を観て語るように勇気づける。

「完全な存在」である超越的存在には、私たちの問題がどのように観えるのか。今回分析したスピリチュアル・セラピーで起きていたのは、これを実際に体験してみることであった。その具体的な内容は、相対的全体論ではなく絶対的全体論でもって物事を観て語ることであった。こうして「個人」を離れ「全体」を主体とした視点を得ることは、共同体感覚をもって物事を観ることとなる。この方法においては、個人のライフスタイルの詳細はもはや問題とならない。クライアントは全体の視点で物事を語ることで、ライフスタイルから離れることを勇気づけられるのである。ひとたび超越的存在の立場でものを見ることを体験すると、日常へ返ってから同じ方法を実践しやすくなるだろう。このようにスピリチュアル・セラピーは、まさに「共同体感覚の実験室」であると考えられた。

5. まとめ

以上、アドラー心理学とスピリチュアリティが融合した、スピリチュアル・セラピーについて、セッションの逐語録を基に分析した。

治療者はセッションの中で、アドラー心理学の基本前提である全体論に基づいた「言葉の変換」

技法を用いて、クライアントに「個人」からではなく「全体」の視点でものごとを語るように促していた。これは、クライアントの共同体感覚育成を目指すものと考えられた。

スピリチュアル・セラピーは、クライアントのライフスタイルに触れずにライフスタイルから離れることを勇気づける、極めて独創的かつ新しい時代の思想に沿ったアドラー心理学治療法だと考えられた。

謝辞

本研究にご協力くださったすべてのみなさま、特に貴重なデータをくださいましたクライアントのみなさま、治療者としてデータをご提供くださり、また研究に際してご指導とたくさんの示唆をお与えくださった野田俊作先生に、心よりお礼を申し上げます。

文献

- [1]大竹優子：心理療法の構造分析 問題解決の手がかり及び抵抗操作の技法について．アドレリアン 23(3),pp210-221,2010.
- [2]大竹優子：心理療法の構造分析Ⅱ プライベート・ロジック（私的論理）言語化の手順と技法について．アドレリアン 25(2):pp79-89,2012.
- [3]野田俊作：真心を目覚めさせる．アドレリアン 19(3),pp233 - 243,2006.
- [4]野田俊作：ライフスタイル分析の新しい方法(1) 現在の問題の語りなおし．アドレリアン 21(1):p1,2007.
- [5]Mosak,H., Dreikurs, R.: Spirituality:The Fifth Life Task. The Journal of Individual Psychology, 56(3),pp257-265,2000.
- [6]野田俊作：個人ブログ『野田俊作の補正項』2009年12月22日．
- [7]野田俊作：アドラー心理学と仏教における全体論．アドレリアン 14(1),p4,2000.
- [8]H.L.Ansbacher/ アドラーギルド翻訳工房訳：Social Interest という概念．アドレリアン 5(2),p132,1992.
- [9]野田俊作：アドレリアン・セラピーとは何か？．アドレリアン 20(1),pp9-16,2006.
- [10]Sperry,L. : To Be or Not To Be Adlerian: The personal and Original Dynamics of Establishing One's Theoretical Orientation, The Journal of Individual Psychology,63(2),pp126-135,2007.
- [11]前掲3 , p235.
- [12]前掲3 , p233.
- [13]前掲3 , p242-243.
- [14]野田俊作：個人ブログ『野田俊作の補正項』2004年10月16日．
- [15]野田俊作：解釈と正対の技法．アドレリアン 2(2),p118-p123,1988.
- [16]前掲3 , p241.
- [17]前掲3 , p239.

更新履歴

2018年11月20日 アドレリアン掲載号より転載